

「平和行動in沖縄」に参加して

宇和島市職員労働組合 宮川敦

私の母は、テレビに映る戦争物の番組が嫌いだ。なぜなら、幼いころの怖い戦争体験を思い出すからなのようだ。そのことを知っていても、私は夢中でそのような番組を見ている。

飛行機から見た沖縄は、予想していた以上に海は青く輝き、町はまぶしかった。その光輝く那覇の町に降り立った6月23日は、沖縄の「慰霊の日」であった。そこで、私たちは「沖縄の陰」を知ることになった。

沖縄滞在3日間、様々な沖縄の戦跡・基地等を見て回って「沖縄の人の心」が少し分かったように感じた。ただ本当に理解することは、不可能であるという事も私自身分かった。

ただ、一番気付いたことは、沖縄の人にとって戦争体験を語ることや写真・日記などを見せることについては、先ほどの私の母同様、思い出したくない、自分の人生から消したい記憶だったのではないかと思った。その様な不幸な出来事を、私たちに伝える事の苦しみを私たちは感じなければならないと思った。それと、もう一つ「喜納昌吉・ミニ平和コンサート」では、喜納さんは、沖縄内で起きる事件を例えに挙げて「生贊(いけにえ)が起きないと日本国民は沖縄の問題に目を向けない。次どのような生贊が必要なんだ。これ以上の生贊を沖縄県民は望まないし、生贊が無くても、沖縄の苦しみが今も続いている事を本土の人に分かってほしい」と言っていた。

私は、この3日間沖縄の人の声を聞くことにより、改めて「沖縄の犠牲の下、私たちの平和は成り立っている」事を知った。「平和行動in沖縄」に参加していなければ、この様な事は、一生分からずにいたと思う。この「平和行動in沖縄」に参加させて頂いた方に感謝したいし、今後も私たちの組合員が一人でもこのような活動に参加して、人として成長していくことに期待したい。